

中国は ASEAN 各国との軍事演習を拡大

漢和防務評論 20150504 (抄訳)

阿部信行

(記者コメント)

中国は反テロ演習の名目で ASEAN 国との軍事演習を拡大しようとしています。その狙いは、東南アジアにおける政治的、軍事的影響力を拡大し、米国のアジア回帰戦略に対抗するためです。中国は南シナ海で領有権を争っているマレーシアとも演習を行いました。中国が駆け引きに使うのは、推測すれば経済支援、武器の安価な供与であろうと思います。

KDR クアラルンプール KHOO JIN KIAT 特電：

2014 年 12 月 22 日から 26 日にかけて、中国はマレーシアと” 和平友誼 (PEACE AND FRIENDSHIP)” と号する聯合卓上演習 (TABLE TOP EXERCISE) を行った。中国と個別の軍事演習を行った ASEAN 国は 4 ヶ国に増加した。これは中国が” 中国主導の東南アジア反テロ演習圏” を形成しつつあるように見える。

中国が東南アジア国家と行う多国間軍事演習は、” ASEAN 国防部長拡大会議” (ADMM PLUS) の枠組の下で行われる。しかし中国は、この枠組の他に 2007 年から東南アジア国家との間に、別口の聯合軍事演習の枠組を建設している。しかしこの聯合軍事演習の枠組は米軍主導の” CARAT EX” とは異なる。後者は、米軍が毎年東南アジアにやってきて同盟国と交互に軍事演習を行っている。しかし中国の” 反テロ演習圏” は毎年各当事国と場所を変更しながら行っている。

マレーシアは、中国と聯合演習を行った東南アジアで 4 番目の国家である。特記すべきことは、マレーシアは南シナ海で中国と領有権を争っている国家であることだ。今回の聯合卓上演習においては、2015 年に実兵演習を実施するかどうか検討された。実施されるとすれば、演習項目は人道主義に基づく救災、聯合船団護衛、聯合搜索救援及び聯合ハイジャック対処である。東南アジアにおいては、タイ国は最も早く中国と 2 国間演習を行った。両国の演習は、ニックネームが” 突撃” 及び” 青色突撃” である。両国陸軍は、2007 年、2008 年及び 2010 年に 2 国間の” 突撃” 演習を行った。2012 年には中・タイ海軍陸戦隊は” 青色突撃” (BLUE STRIKE) 演習を行った。2013 年には両国陸軍部隊が” 突撃” 演習を行った。

2009 年には、中国と東南アジア国家の演習圏は、シンガポールに拡大した。中国とシンガポールの 2 国間聯合演習はニックネームが” 合作” (COOPERATION) であり、2009 年と 2010 年に実施された。当時演習の内容は専ら反テロ等に限定された。

しかし 2014 年度の” 合作 2014” 演習においては、聯合歩兵演習及び実弾射撃に拡大された。両国の歩兵連隊は南京軍区において過去最大規模の 2 国間軍事演習を行った。シンガポールの報道によると、中国側の戦車小隊及び迫撃砲小隊の火力支援

の下、シンガポール・中国の聯合歩兵連隊は左右両側から同時に敵陣地に向かって前進、山地における聯合戦闘演習を行ったという。

中国の演習圏は、2011年には、インドネシアに拡大した。同年、両国はニックネーム”利刃-2011” (SHARP KNIFE) と号する第一回目の特種部隊演習を行った。その後、この演習は2012年に中国済南省で行われた。2013年に同演習は”空降利刃-2013” (SHARP KNIFE AIRBORNE) 演習にグレードアップし、2014年にも再び”空降利刃-2014” 演習が行われた。

中国と2国間演習を行う東南アジア国家の数は増加しつつある。中国の狙いは、この地域に中国が主導する演習圏を建設し、東南アジアにおける政治的軍事的影響力を拡大することにある。もし中国がこの反テロ演習を"CARAT EX" のような演習に発展させようとするならば、それは不可能ではない。マレーシアが中国が主導する演習圏に加入したことは、中国にとって好ましいことである。その主な理由は周辺国への影響力である。中国はマレーシアとの演習を模範とすべきモデルとした。中国とマレーシアの間には争いがあるが、依然として平和を維持し軍事演習すら行っている、と。しかし、消息筋の指摘によれば、マレーシアと中国の今年の実兵演習地域は、南シナ海ではなく、マラッカ海峡になると言う。

中国が東南アジアに建設しつつある演習圏のここ数年の発展傾向を見ると、特徴は次の4点である。

第一、参加国数が増加しつつあり、今後中国軍が東南アジアに進出する回数が増加する。本誌の推測では、演習に参加する東南アジア国家は逐次増加する。次ぎはブルネイの可能性が最も高い。中国とブルネイは軍事交流備忘録 (MEMORANDUM OF UNDERSTANDING ON MILITARY EXCHANGES) に署名した。ブルネイは2013年第一回”ASEAN 国防部長拡大会議” 人道救災演習を開催し中国は同演習に参加した。マレーシアがこの演習圏に参加したことがブルネイの意思決定に影響を与えた。マレーシアが南シナ海の主権争いの当事国であるにもかかわらず、中国との演習を行ったのだから、ブルネイが参加しても問題ないはず、と。

第二、演習の規模が拡大しつつある。特に中国・シンガポール間の”合作” (COOPERATION) 演習は聯合歩兵演習に拡大した。

第三、演習は、非正規の協力及び反テロの名目から始まり、

第四、演習の制度化には至っていない。制度化するまでには更に長い期間が必要だ。例えば、中国・シンガポール間の”合作” 演習は2009年から始まって3回行われたただけだ。中国とインドネシアは比較的平穏である。中国とタイ国は平穏ではない。過去8年間、演習を行ったのは5年間だけである。今後中国とマレーシアの演習がどう推移するか観察している。

中国の反テロ演習圏は、演習が短期間であり、米国主導の"CARAT EX" 集団には比較すべくもないが、長期的に見ると、中国が東南アジアで軍事的影響力を拡大する重要な土台であり、今後米国のアジア回帰戦略と競争することになる。現在の

政治状況から見て、フィリピンとベトナムが中国主導の演習圏に加入する可能性はほとんどないとしても、彼らはこの演習を注視しているはずである。

以上